

独立行政法人 農業技術研究機構

果樹研究所ニュース

National Institute of Fruit Tree Science

2002. 9

園芸試験場百周年記念特集



梶浦果樹研究所長による開式の辞

来賓の方々 (左から 野間赳農林水産副大臣、矢澤進園芸学会副会長、
寺井信隆日本園芸農業協同組合連合会代表理事会長、
渡邊穎悦社団法人日本種苗協会会長)

園芸試験場開設百周年を迎えて	2
園芸試験場百周年記念式典	3
式辞・祝辞・記念講演・各地の報告	
果肉が黄色で甘味が多いクリ新品種 '秋峰'	16
白くて玉張り良好なモモ新品種 '白秋'	17
〈トピックス〉	
平成13年度果樹試験研究推進会議	18

平成13年度果樹研究成果情報	18
平成14年度果樹研究所一般公開	19
研究所評価委員会	19
サイエンスキャンプ	19
表彰・受賞	20
〈掲示板〉	
人事異動・研修・海外出張・依頼研究員 等	21





園芸試験場開設百周年を迎えて

カンキツ研究部長 高辻 豊二

農商務省の農事試験場園芸部が静岡県興津町に開設されて百年が経過し、この6月20日には東京虎ノ門で記念式典と祝賀会が開催された。これと前後して平塚・つくば・口之津などでも記念行事が行われ、園芸試験場発祥地のカンキツ研究部興津でも盛大に一般公開、記念式典・講演会、桜会同窓会などが催された。果樹農業をめぐる情勢が厳しさを増す中で、新旧関係者が一堂に会して久しぶりに意気上がる一日を過ごした。式典には戦前の卒業生も含め全国から300余名が出席され、研修当時の懐古談などに花を咲かせた。出席者の多くは昭和50年以前の卒業生で、戦後の混乱期から発展期にかけてみかん産業の隆盛を支えた先輩たちであり、また恩田鉄弥初代場長など草創期功労者の縁故者数名も出席されていた。

我が国果樹農業の発達過程は、渡辺(1972)によれば1)生成期(明治20年代中葉～大正中期)、2)確立期(大正後期～昭和初期)、3)拡充期(昭和農業恐慌～戦前統制期)、4)戦後復興期(昭和20年代)、5)高度経済・増殖期(昭和30年代)、6)貿易自由化・調整期(昭和30年代末以降)に区分される。興津園芸部が開設された明治35年当時の果樹産業は、技術的に模索段階の生成期であって、担い手は地主が主体の大規模経営、立地条件は地代の安い傾斜地＝劣等地、栽培法は密植・強剪定の粗放栽培で、技術水準が未熟なため病害虫の激化と廃園の増加で生産性は低迷していた。このような時代背景の下で設置された園芸部の業務内容は、1)品種試験、2)栽培試験、3)模範栽培、4)優良母樹の苗木配布、5)見習生の指導養成で、後に施肥基準策定や病害虫防除試験が加わっている。また、この時期に石原助熊氏による欧州式剪定法、谷川利善氏による交配育種、熊谷八十三氏による苗木育成など果樹研究の基盤作りが行われた。旧い写真に残された宮廷園芸の名残りと思われる見事なカンデラブル整枝・ホリゾントル整枝なども、この模倣・模索の時代にあっては斬新な西欧の先端技術だったと思われる。

る。これら先人の努力が積み重ねられて、袋掛け・ボルドー剤散布等の病害虫対策を始めとする基本的な技術体系が構築され、生産者の技術水準も徐々に向上して小農民層を主たる担い手とする今日の労働集約的な果樹農業の原型が確立された。

その後、昭和恐慌以降の養蚕衰退、戦時中の統制経済、戦後の食料不足と農地改革、高度経済成長期の増殖・増産と労働力の農外流出、貿易自由化に伴う外国産果実との競争など激動の時代を経ながら、今日の成熟した果樹産業に発展してきた。この発展過程に対応して試験研究の分野では、高温多雨の我が国気象風土に適応した病害虫防除法や棚栽培法、食生活水準の向上に対応した品種育成や品質向上技術、担い手不足や高齢化に対応した結実管理・機械化技術などが開発されている。カンキツ研究の分野では、各時代の生産現場で生じた困難な技術的課題に対してマルチ栽培、隔年交互結実栽培、ハウス栽培、清見・不知火等の育成、ヒリュウ台の利用、ウイルスの無毒化、貯蔵予措、多目的灌水、モノレール、園内作業道、機能性成分、光センサー選果機など幾多の技術開発で応えてきた。先導的技術としては、摘果剤・ボックス栽培・群状結実法なども加えられる。

しかし、カンキツ生産の現状は隔年結果の増大、果実品質の年次変動、果実消費の伸び悩みなど経営安定を脅かす研究問題が山積しており、品質向上・生産安定・軽労化・環境保全等の革新的な技術開発が強く求められている。これら現行の高度な技術水準を踏まえて更に先進的かつ実用的な技術開発を進めることは大きな困難を伴うものであるが、この百周年を機として園芸部発足当初の果樹産業黎明期に道を拓かれた先達を見習い「生産現場を見据えつつ中長期的視点に立った基礎的・先導的研究」の展開を進めていきたい。

果物展示館③
—柿—



文鎮



朱肉入



土鈴



針刺



園芸試験場百周年記念式典

去る6月20日、東京虎ノ門パストラルにおいて約450名の参加者のもとに園芸試験場百周年記念式典が盛大に開催された。

この記念式典は、明治35年(1902年)6月20日、園芸試験場の前身となる農商務省農事試験場園芸部が静岡県庵原郡興津町に開設されてから、今年で百周年を迎えたことを記念し、園芸試験場関係研究機関であり、現在、独立行政法人農業技術研究機構傘下の果樹研究所、花き研究所、野菜茶業研究所の3研究所及び東北農業研究センター野菜花き部、九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部の2部の共催により行われた。

本記念事業は、今から約3年前に事業推進委員会を組織し、園芸試験場OBによる準備室を果樹試験場内に設け、また、推進委員会の下に記念誌刊行部会、祝賀会式典部会、財務部会を設け、積極的に活動を行ってきた。また、園芸関係者やOBらにより百周年記念事業祝賀会が組織された。

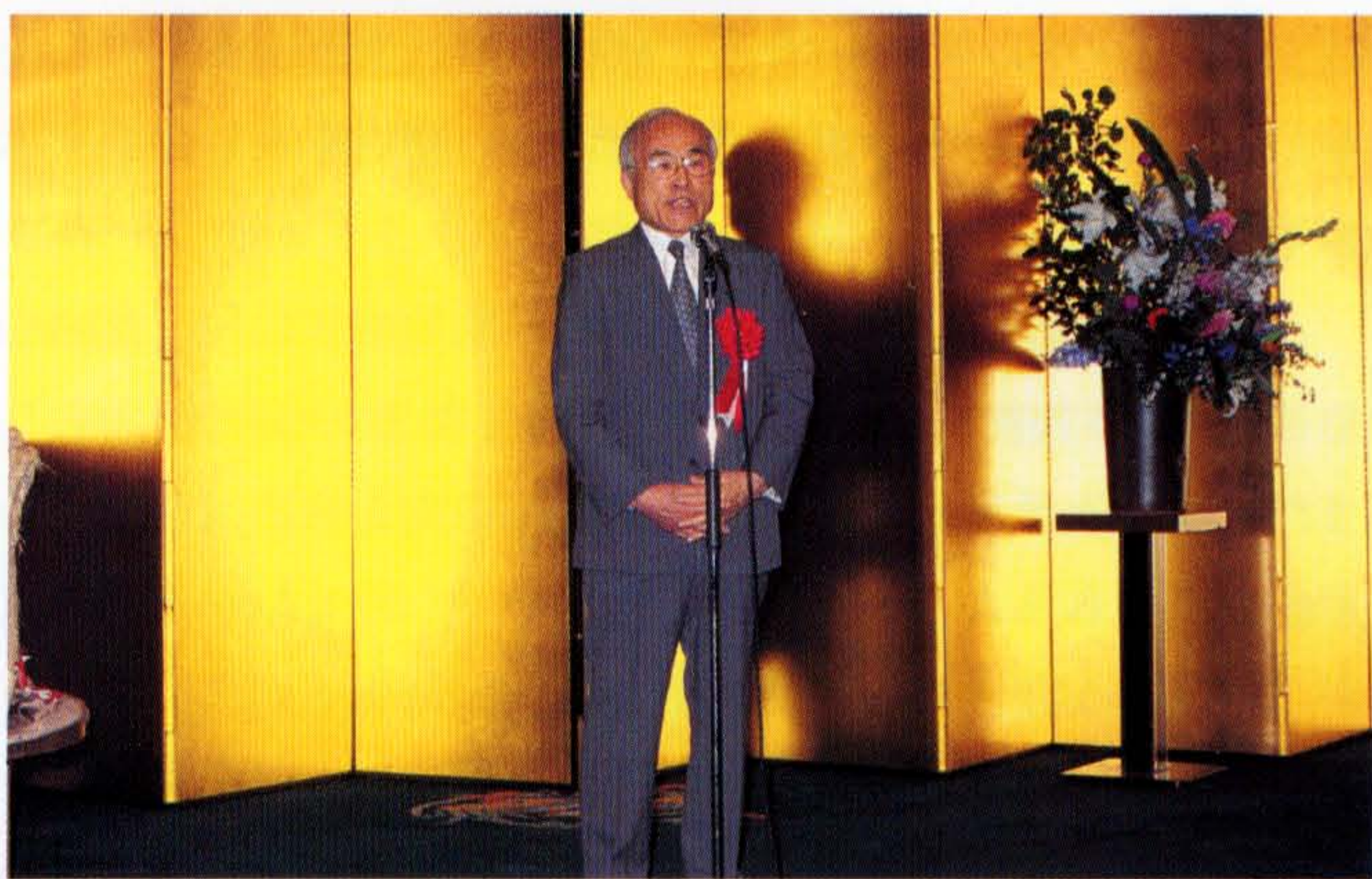
記念式典は虎ノ門パストラルにおいて午後2時から開始された。式典は駒村研三果樹研究所企画調整部長の司会のもとに梶浦一郎果樹研究所長の開式の辞で始まり、中村浩農業技術研究機構園芸研究担当理事の式辞のあと野間赳農林水産副大臣、矢澤進園芸学会副会長、寺井信隆日本園芸農業協同組合連合会代表理事会長および渡邊穎悦社団法人日本種苗協会会長からそれぞれ祝辞をいただいた。つづいて、手作りによるビデオ「園芸試験場100年の歩み」の上映の後、畑江敬子お茶の水女子大学教授による記念講演「日本人の食生活における園芸作物の役割」が行われ、さらに平塚出身のソプラノ歌手の岩崎由紀子国立音楽大学助教授によるホールに響く歌唱公演「初夏に歌う」で盛り上がり、最後に石内傳治野菜茶業研究所長が閉式の辞を述べ、式典は終了した。

午後5時15分からは記念祝賀会が開催され、岡野邦夫花き研究所企画調整室長の司会のもと西貞夫園芸試験場百周年記念事業協賛会会長の開会挨拶、甕滋農林水産技術会議会長と坂野雅敏審議官の祝辞の後、鏡割りが行われ、園芸試験場OB代表の岸國平氏の乾杯と続いた。また、昭和25年入場の研修生で園芸試験場OBである山下忠男和歌山県桃山町長による園芸試験場の思い出、浅野次郎花き研究所長による近況報告(各研究所の部長紹介)と祝賀会は進み、最後に果樹試験場及び野菜・茶業試験場の総務部長を歴任された若林健生氏の閉会の辞で幕を閉じた。

記念式典当日には園芸試験場百周年記念事業の一環として刊行された、記念誌「園芸試験場百年の歩み」、農業技術研修生、園芸試験場関係職員、依頼研究員などを組織する「桜会会員名簿」が配布された。また、果樹、野菜、花きの写真で構成された卓上型カレンダーが記念品として配布され、好評を博した。



西貞夫百周年記念事業協賛会会長の祝賀会開会挨拶



甕滋農林水産技術会議会長の祝辞



鏡割り



式 辞

独立行政法人 農業技術研究機構 園芸研究担当理事 中村 浩



式辞、本日ここに野間農林水産副大臣をはじめとして、ご来賓ならびに関係各位の多数のご臨席を賜り、園芸試験場百周年記念中央式典を挙行いたしますことは、私共にとりまして誠に光栄であり、心からの喜びとするところであります。

明治35年6月20日、国として組織的に園芸研究を行うため、静岡県庵原郡興津町に農商務省農事試験場園芸部が誕生いたしました。これが母体となり、大正10年に園芸試験場として独立し、その後、時代の推移に伴い組織の変遷がありましたが、本年は国における園芸研究が百年の歴史を刻む記念すべき年であります。

この百年の歴史を振り返りますと、明治時代以降、都市の急速な拡大に伴い、その近郊において園芸の振興が図られ、また、第一次世界大戦後には鉄道網が充実し輸送園芸産地の形成が見られるようになりました。そうした背景から沸き上がった旺盛な研究需要に対し園芸試験場はよく応え、多大な貢献を果たしました。

第二次世界大戦中と戦後には、食料の増産が求められる中で、園芸研究は将来に希望を託して地道に続けられ、これが今日への飛躍の備えとなりました。

一方、園芸の振興には、試験研究のみならず、人材の育成が急務であるとして、早くも明治39年に今日まで続いております見習生、あるいは養成研修制度が整えられ、幾多の優秀な人材を輩出してまいりました。これらの方々の活躍もまた、我が国の園芸振興に大きな役割を果たしました。ここに、草創以来の今は亡き諸先輩ならびに志半ばにして戦陣に倒れた先輩各位のご功績に対し、謹んで敬意を表するものであります。

戦後、再び園芸の振興に国を挙げて力が注がれ、昭和36年

に農業の選択的拡大を謳った農業基本法が成立したのを契機に、多彩な園芸産地の形成が進み、これらが今日の園芸産業の基盤をなしております。このように園芸産業が進歩を見るにいたりましたのは、園芸試験場における試験研究の成果、ならびに園芸試験場を巣立った研修生の全国各地における活躍が元になったといっても過言ではないと存じます。高度経済成長期には果物・野菜・花き共に高い自給率を誇っておりました。しかし、近年、経済の国際化が進むにつれ、いずれの園芸農産物も輸入が増加し、自給率が低下する傾向にあります。元来、新鮮さが命である園芸農産物の輸入は消費者にとって好ましいこととはいえません。他方、収益性の高い園芸作物の栽培は集約的な労働を必要とします。このために産地では老いも若きも多くの人々が生産に従事するということが園芸の特徴であります。それだけに栽培面積の減少は農業や農村の維持発展にとって好ましい事態ではありません。食料・農業・農村の問題は自然・生命・環境の問題であり経済・社会・文化の問題でもあります。園芸研究はまさにこうした諸問題に立ち向かうために一層の発展が求められていると思います。

現在、園芸試験場の系譜を引く研究組織は、全て独立行政法人農業技術研究機構に包含されています。すなわち果樹研究所・野菜茶業研究所・花き研究所・東北農業研究センター野菜花き部・九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部であります。これらの研究所におきまして省力軽作業化、コスト低減、高品質化、環境保全、更に消費者に軸足をのけた機能性の向上、安全性の確保などの課題を担い、日々研究に取り組んでおります。これからも、諸先輩の築かれた基礎にたつて、消費者と生産者の声に耳を傾け、最先端の研究手法を駆使しつつ、先導的に園芸研究を進めてまいり所存であります。もとより園芸研究は農林水産省・農林水産技術会議・大学・園芸学会・関係業界・農業団体・都道府県などに支えられていることは申すまでもありません。また、本日、こうして百周年記念式典を迎えることができますのも園芸試験場の百周年記念事業協賛会のお骨折りによるものであり深く感謝申し上げます。

私共、園芸研究に携わる者は、この先百年を見据えて、新たな気持ちで研究に励むことを誓うと共に、今後ともご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます私の式辞といたします。



祝

辞

農林水産大臣代理 農林水産副大臣 野間 赴



本日、園芸試験場の百周年記念式典が挙行されますに当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。園芸関係の試験研究機関が百年の記念すべき節目をお迎えになりましたことにつきましてお喜びを申し上げたいと思います。関係者各位の、これまでのご努力に対しまして深く敬意を表する次第であります。

明治35年に設立をされました農事試験場園芸部に始まります園芸研究がリンゴの「ふじ」、ナシの「幸水」、イチゴの「とよのか」、根コブ病抵抗性を持つ白菜の中間母本、スプレーギクなど多くの優れた品種育成をはじめ、その普及を通して、我が国の園芸農業を支えて来ましたことは高く評価されるところであります。このような華々しい成果を上げて来ました園芸試験場は幾多の変遷をへて、昨年4月、独立行政法人農業技術研究機構の果樹研究所・野菜茶業研究所・花

き研究所に再編をされたところであります。これらの研究所は他の独立行政法人はもとより都道府県の試験研究機関や大学および民間企業との連携をいたしまして、我が国の園芸農業のかかえる課題の解決に向けまして、果敢にチャレンジすることが、今後益々期待をされているところであります。ところで農林水産省におきましては、BSE問題や食品の虚偽表示問題などを踏まえまして、この4月消費者へ軸足を移し、農政の改革を目指して食と農の再生プランを公表いたしましたところであります。私は、このプランの着実な実施には、技術開発の推進が不可欠との判断から、食の安全と安心を支えるための技術・新鮮で美味しい国産の農水産物を消費者に提供するために、必要な技術の開発を進め、これらの研究成果をもとにいたしまして、地域の個性を生かした先端的な農業経営の支援にも取り組み始めたところであります。このような中で園芸関係の技術開発につきましては、有害物質の吸収抑制技術の開発・機能性の解明・品種育成・栽培技術の開発・貯蔵技術の開発などによる多くの研究成果に期待をいたしております。今後、これまでの百年にわたります研究成果の蓄積を大いに活用しますと共に、産学官の連携の一層の強化を図っていただきまして、我が国における園芸研究の中核的な機関といたしまして研究開発の推進に更なるご発展を遂げられますようご期待を申し上げる次第であります。

結びに当たりまして、ご参集の皆様のご健勝を祈念をいたしまして、お祝いの言葉といたします。



祝

辞

園芸学会副会長 矢澤 進



ただいまご紹介にあずかりました矢澤でございます。園芸学会の立場から一言祝辞を述べさせていただきます。本来は園芸学会会長であります果樹研究所長梶浦一郎氏から申し上げさせていただくはずでございますが、会長は本日の祝賀会の開催者側ということで代わって副会長の私から述べさせていただきます。

園芸試験場百周年、誠におめでとうございます。園芸学に携わる者としていたしまして大変嬉しく思いますと共に、百年という長い歴史を支えて来られました方々に対しまして敬意を表す次第でございます。

園芸試験場は、明治35年、当時の農商務省の農事試験場園芸部が静岡県興津に設けられたというのは副大臣も申された所でございます。

さて、私共の、園芸学会でございますが、園芸試験場ができて21年後に発足いたしております。学会発足から今日に至るまで園芸試験場の関係機関の方々には多大なご尽力をいただいて参っております。ご存じな方もおいでかと思いますが、園芸試験場と学会、特に私共が大切にしております学会誌を中心にいたしまして、園芸試験場と学会の関わり合いをご紹介させていただきまして祝辞に代えさせていただきたいと思っております。

先に述べましたように、園芸学会は関東大震災の年、大正12年に園芸試験場の方々のご協力を賜りまして創設されました。創立当時の役員の中には園芸試験場場長を歴任された熊谷八十三氏、浅見興七氏、更には石原助熊氏などの園芸試験場関係者が加わっております。園芸学会が今日の姿となるには幾度の節目がございましたが、まず、第1の節目である学会の創立には先に述べましたように園芸試験場関係の諸先輩のご尽力をいただきました。創立2年後の大正14年には、園芸学会雑誌の第1巻第1号が発刊される運びとなりました。創刊号の最初の論文は、先にもご紹介いたしました浅見氏がお書きになられたリンゴ属の分類学的標徴についてでありました。その番号の1号論文は園芸試験場関係者によるものでございました。第1巻発行後、第2巻が刊行されたのは、6年後の昭和6年でございます。当時園芸研究の成果が発表されていたものといましては、明治39年以来、園芸試験場が研修生を対象に発刊していられた「園芸の研究」と、もう一つは、養賢堂から出版されておりました「農業及び園芸」など数点がございました。園芸試験場刊行の「園芸の研究」はおそらく園芸学会雑誌の発刊・再刊に大きな役割を担っていたのではないかと私は思っております。学会雑誌は、その後順調に刊行されますが、第二次世界大戦

の勃発と共に我が国は戦時体制と姿を変えていきました。戦況厳しい昭和19年に学会雑誌第15巻が発刊されてございます。この第15巻には梶浦實氏らの温州ミカンに関する論文、門田寅太郎氏らの本邦里芋品種に関する論文、岩崎藤助氏のカンキツに関する論文が2つなど園芸試験場関係者による論文は25編の中の7編を占めておりました。戦禍広がる中でも園芸試験場の方々は休むことなく研究を続けられていたということです。今、この平和な時代に当時の園芸試験場関係の方々の努力を思いますとき、言いようのない思いが込み上げて参ります。昭和20年終戦となり我が国は極度の貧困と飢えに陥りました。さすがに昭和20年、21年の2カ年間は学会誌は世に出ることはありませんでした。この時期は学会の第2の節目だと思います。まだ戦後の混乱が続く昭和22年3月、第16巻が刊行されました。第16巻の最初の論文は農林省園芸試験場の伊東秀夫、土屋四郎氏のサツマイモの塊根形成に関する論文でございました。

この時以来、学会誌は途切れることなく今日に至っておりますが、ここでもまた園芸試験場の方々のご支援を受け園芸学会は元気を取り戻すことができました。

さて今日、私どもは様々な難しい問題に直面しております。農業生産の低迷、諸外国からの農作物の輸入、食の安全、食と健康、人々の心豊かな生活趣向、環境問題等々でございます。まさに園芸学会は第3の節目を迎えつつあるように思います。このような中であって園芸試験場関連の各研究機関では既に生物工学的手法の展開、安全で機能性の高い食材の生産、遺伝資源の幅広い利活用、栽培の省力化技術の開発など園芸生産と消費者の一体化を目指して多様な研究が進められております。園芸学会といたしましても大変心強く思っている次第でございます。

最後になりますが、園芸試験場の関連研究機関の益々のご発展を祈念いたしまして、お祝いの辞とさせていただきます。



祝

辞

日本園芸農業協同組合連合会代表理事会長 寺井 信隆



ご紹介をいただきました、日園連の寺井でございます。園芸試験場創立百周年の記念式典の盛会を心からお祝い申し上げますと共に、一言ご祝辞を申し上げたいと思います。

祝辞、光輝ある園芸試験場百周年を記念し、果樹生産者団体を代表して、一言ご祝辞を述べさせていただきます。本日は開設百周年、誠にありがとうございます。心よりお祝いを申し上げます。顧みますれば園芸試験場は明治35年静岡県興津町に農商務省農事試験場園芸部園芸試験地として開設され、以来、今日まで百年の歳月を重ねて参りました。この間、組織の改革など様々な変遷があったものの、功績は数えきれないほど多岐にわたり、現在の園芸産業の隆盛を築く基礎となった訳でございます。その中で特筆に値することの一つとして、明治39年に開設された見習生制度がございます。現在では、その名称が農業技術養成研修課程となっておりますが、卒業生は開設以来、今日まで5,000名を超えると承っております。卒業生はそれぞれの時代に、私どもの日園連の会員、農協の果樹専門技術者として、また、全国の地域で果樹園芸のリーダーとなって活躍されておりますが、彼らの弛まぬ努力があったからこそ、現在の園芸産業の隆盛があるものと確信をいたしております。次に挙げられるのは、果樹の優良品種および優良台木の育成に関することでございます。その代表的なものとして昭和37年に登録されたリンゴの「ふじ」があり、また、昭和34年に登録されたナシの「幸水」などがあ

りますが、これらは現在も我が国の果樹の主力品種として栽培されております。カンキツでは昭和38年に登録された「興津早生」や、昭和54年に登録された「清見」などがありますが、特に「清見」につきましては、その食味の良さから交配組み合わせの親として活用され、将来有望と思われる品種が次々と生まれて来ております。果樹農家の高齢化、高齢化が深刻になっている昨今ですが、農作業の省力化と共に消費者に美味しい果物を提供していくことが消費拡大につながり、後継者が育っていくことにもつながって行くことと思います。新しい品種を創出するためには、長い年月を要する地道な努力が必要ですが、優良品種および優良台木の開発育成につきましては、果樹農業の発展のための必要不可欠な研究であり、今後の果樹研究所の重要な柱として、継続されますことを期待いたしております。この他、果樹研究所は、これまで省力低コスト栽培のための、わい性台木の育成・安定生産のためのウイルスフリー株の育成など現場に密着した数々の研究成果がありますが、最近では果樹の病害および害虫の発生生態の解明と防除技術体系の確立に関する研究にも積極的に取り組んでいると聞き及んでおります。国民の安全・安心への関心が年々強くなっていることから、全国の果樹生産者は、その成果に大きな期待をいたしておるところであります。ご承知のとおり景気低迷などの影響により果実の消費は低迷いたしておりますが、一方では国民の健康・安全志向が大変強くなっております。我々果樹生産者団体は低迷する消費に歯止めをかけ、国民の健康増進と果実の消費拡大を目指し、行政の支援などを得ながら、「毎日果物200g運動」の指針に基づき組織をあげて様々な消費宣伝活動に取り組んでおります。このため果樹研究所は、現在取り組んでおります人の健康に役立つ機能性成分の探索解明に関する研究は果実の消費拡大と、国民の健康志向に直結する研究として、生産者は大いに期待をいたしておるところであります。創立百周年を契機として貴研究機関が益々発展されますことを祈念し、簡単でございますが祝辞とさせていただきます。



祝

辞

社団法人 日本種苗協会会長 渡邊 穎悦



祝辞、本日、ここに園芸試験場百周年記念の式典が挙行されるにあたり、社団法人日本種苗協会を代表して心からお祝いを申し上げますと共に、長年に亘り、ご指導、ご支援いただいておりますことに深く感謝の意を表する次第でございます。

明治35年農商務省農事試験場に興津園芸試験地が設置されて以来、幾多の組織や内容の変遷をへて、今日に至っておりますが、この百年間の前半、太平洋戦争が終結するまでは果樹園芸を中心とした試験場であったように思います。私共、種苗業界の主力商品であります野菜や花きについては戦後の昭和22年、園芸試験場の本場が興津から平塚に移転してから本格的な研究が始まりました。花の部門の開設には、なお多くの年月が必要でありましたが、野菜部門では民間種苗会社が世界に先駆けてF1時代に突入したこと、日本が高度経済成長期を迎え施設園芸が急速に普及したり、野菜の周年需要が増大したことなどと相まって、その研究の重要性が認識されて、飛躍的な充実発展を見ることとなりました。そうした状況の中、東京オリンピックの翌年ぐら이었다と記憶しておりますが、園芸試験場と種苗業界、日本種苗協会の前身であります全国種苗業連合会でありましたが、その連合会との研究に関連した最初の公式な懇談会が持たれました。内容は当時の種苗業界が育種や栽培に関してどのような問題に直面していて、園芸試験場にどのような研究や技術支援を望むかということでありました。その頃、記念事業協賛会の西会長がアメリカ留学から帰国されて新進気鋭のリーダーとしてご活躍でしたが欧米の考え方を参考に日本での官民の役割分担のあり方について提言され、現在の様なシステムが出来上がったと理解しております。そして調和の取れた官民の連携により

全体の技術水準が大幅に向上し、世界の種苗市場における日本の地位は確固たるものとなり野菜と花きではオランダ・アメリカと並んで世界の先進地産業構造の一角を担うという大きな成果を上げるに至っております。日本種苗協会は具体的には、次の3点で大きな恩恵を受けてきたということが出来ます。

第1点は、育種に関わる手法の開発と育種素材や新品種の提供であります。先程、ご紹介いたしました園芸試験場と種苗業界の懇談会は、その後、育種技術研究会シンポジウムという形に生まれ変わり、現在まで25回を数えるに至っておりますが、毎回タイムリーなテーマが取り上げられ諸問題解決のための情報交換に非常に役立っております。また、アブラナ科野菜の根コブ病抵抗性検定技術をはじめとする各種病害抵抗性の検定と選抜の技術、ウイルス病と軟腐病抵抗性の平塚1号の白菜や、萎ちょう病抵抗性の興津3号・6号トマトなど、その技術や素材は耐病性品種の育成に大きく貢献しております。花きの部門では、種間交雑のユリ、パシフィックハイブリットが画期的品種として評価されていることをはじめ、その他多くの品種が育成され利用されております。

第2点は、野菜や花きの品種審査会の開催による技術ならびに品質の向上であります。この審査会は全種連時代から行っているものですが野菜で53回、花きで48回に至っております。栽培は都道府県の専門場所で行われ、その実施に際しては、現在、野菜茶業研究所と花き研究所の方々に審査長をお願いし、ご指導を得ながら行っているところでございます。高い評価を得られた品種は大臣賞の対象になるということで育種の振興に多いに役立っております。

第3点は、人材の育成であります。園芸試験場で研修を受け種苗業界に入って活躍しておられる方々は70才代を筆頭に数多くおられますが、この方々の存在が種苗業界の発展に重要な役割を果たして来たことは申すまでもありません。近年の依頼研究員の制度も同様の成果が期待されます。この様に日本種苗協会は色々な分野で園芸試験場の恩恵に浴して参りました。改めて深く深く感謝を申し上げますところでございます。

しかし、今日、国際化の進展により我が国の農園芸は厳しい環境下に置かれており、食の安全性やコスト低減に向けて、全力を挙げて取り組まなければならない状況にあります。種苗の世界でも国際的優位性を維持して行くのは容易ではあり

ません。これからは、今まで以上に、ご指導・ご支援をお願いしなければなりません。

園芸試験場百周年をお祝いいたしますと共に、独立行政法

人という新体制でこの難関を乗り越え、次の百年に向けて大いに発展されますよう祈念して祝辞といたします。

記念講演

「日本人の食生活における 園芸作物の役割」

お茶の水女子大学教授 畑江 敬子

百周年というおめでたい席に講演をするという非常に光栄な機会を得まして、誠にありがとうございます。日本人の食生活における園芸作物の役割ということでしばらくお時間をいただきたいと思います。

現在の日常の食事様式の原型、つまり庶民階級が間食も含めて何かの形で一日に三回食事を摂る、汁と飯と副菜と漬物を合わせるというような様式は江戸時代の中期以降にはできあがっていたともいわれています。しかし食材の種類も量も今に比べれば限られていました。果物を例にとると、その果物の種類は同じでもそれぞれの品種は限られ、今ほどバラエティーに富んではいなかったようです。国の園芸試験場ができた百年前頃の食生活をみても、現在に比べ食材の種類は非常に限られています。明治44年に出版された「婦人の友」という婦人雑誌の7月号に掲載されている1ヶ月分の昼と晩の献立があります。7月の1ヶ月ですから31日、昼・晩あわせると全部で62回になりますが、それらの食事の中に出現する野菜、いも類、豆類を数えてみました。明治44年当時の献立はどのようなものか一例を挙げますと、昼は干物、晩はナスの肉詰めソース煮です。別の日を見ますと、昼はインゲンとジャガイモの煮付け、晩は生節の酢みそかけ、サラサポテトというようなくあいです。出てきましたのはインゲン・キャベツ・ダイコン・フキ・エンドウ・ナス・ジャガイモ・トロロイモ・ダイズなど、野菜・果物・いも・豆類あわせて19種類です。さらに10年くらい後の大正9年に出版された「主婦の友」にも献立の例が掲載されています。こちらは2月の1週間の献立です。こちらのもどどのようなものを食べていたか一例を挙げますと、朝：豆腐みそ汁と鉄火みそ、昼：クルマ麩

園芸試験場百周年 記念式典



の油煮とハスとハマグリのごしぐれ煮、晩：昼の残りのごしぐれ煮と塩鮭というようになっています。1週間、朝・昼・晩あわせて21回ですが、ここに出現するのは、ダイコン・マメ・ネギ・コマツナ・カブ・サトイモなど10種でした。どちらの献立にも漬物は省略されていると考えられますが、献立に出てきた野菜の種類はそれほど変わらないはずです。さて、平成14年はどうでしょうか。「栄養と料理」という雑誌に掲載されている2月の1週間、朝食・昼食・夕食に登場する野菜を勘定してみました。野菜の種類はいも類も含めて27種類もありました。この間に野菜・果物の生産・消費量には増加したもの、減少したものなどいくつかの変化がありました。このことをやはり料理の中の出現頻度から見ました。主婦向けの雑誌には必ずといっていいほど料理が掲載されています。そこで大正6年から9年の3年間の「主婦の友」、昭和40年の1年間の「主婦の友」、平成7年の1年間分の「栄養と料理」から、それぞれの年度の中に掲載された料理の数をピックアップしました。料理の数はそれぞれ510件、745件、799件ありました。そのなかで野菜はたくさんありますので23種に絞りまして、23種の野菜がこれらの料理の中に何回利用されているか、出現回数を数えたデータがあります。新しいところで平成7年の1年間に掲載された料理799件のなかに、出現頻度が高い野菜はニンジンで、全料理の20%に用いられていました。ついでタマネギが16.2%を占めていました。ニンジン、タマネギに続く出現頻度3位はダイコンですが、大正9年頃に比べ頻度は減少しています。ダイコンは国民1人当たり収穫量のデータを見ましても、量の点で大きく減少しているばかりでなく、各地にあった多くの品種がごくわずかにな

ってしまった野菜の代表です。私は練馬区に住んでおりますが、練馬ダイコンを大量にたくあん漬にしたというかつての面影は全くありません。ネギも同様に減少派で、出番が増加したのはトマト・セロリ・キュウリなどサラダ用の生で食べられる野菜です。大正9年頃にはグリーンアスパラガス・レタスは出現回数0です。驚いたことにハクサイも0です。結球したハクサイがまだ登場していなかったようです。これらは昭和40年、平成7年に徐々に利用される回数が増えています。カイワレ・シュンギク・チンゲンサイ・ズッキーニは平成7年になって初めて出現しています。このような変遷は、社会情勢の変化や消費者の食生活の変遷を反映しています。特に昭和40年頃というのは、オリンピックとともに日本の高度成長期で食生活の洋風化が一段と進み、食生活の多様化が進んだ年でもありました。

果物については最近少しずつ摂取量が減り、ジュースが増えていることが指摘されていますが、摂取量は年代により異なっています。高齢者の方が果物の摂取量の多いことが国民栄養調査からわかります。また好む果物の種類も年代によって異なっています。総務庁が毎年発表する家計調査年報によりますと、カキが最も世帯間の購入数量に差があり、高齢者の方が多く購入する果物です。ちなみに1998年に60～64才の世帯がカキを購入した数量は、25～29才の世帯の10倍以上です。1988年にはこの差は4倍程度でしたから、年代間の差が広がったことがわかります。ナシ・リンゴ・ミカンなども高齢者の方が購入数量の多い果物です。イチゴとバナナは年代間に差の小さい果物です。若い年代ほどジュースを良く購入しています。この傾向はこれから先を予想するデータかもしれません。私の研究室で北海道・九州を含めた全国の20歳前後の学生600名を対象に、家計調査年報に挙げられている果物12種に対する嗜好意欲尺度、つまりどの程度食べたいと思っているかを調査したことがあります。家計調査年報でいう果物とはリンゴ・ウンシュウミカン・ブドウなどの他にスイカ・イチゴも含んでいます。若い人たちに好かれた果物の上位3つは、ナシ・イチゴ・モモでした。イチゴを例にとると、多くの学生が「最も好きな食品に入る」あるいは「機会があればいつも食べたい」というジャンルを選んでいました。逆に余り好まれなかったものはカキ・ナツミカン・グレープフルーツでした。グレープフルーツもナツミカンも、「ときどき食べたい」あるいは「たまたま手に入れば食べてみる」というジャンルを多くの人が選びました。好まれた果物の共通点はジューシーで食べやすいもので、好まれなかったものは食べにくくジューシーでない、あるいは酸味の強い果物でした。干し柿は歴史的にお茶のお菓子として、とても貴重なも

のでした。加工して食べることも工夫すべきではないかと思っています。ところで野菜・果物はかつては旬がはっきりしており、旬の時期しか食べられないものでした。また、各地域にそれぞれ特徴のある野菜がありました。それがはっきりとした季節感と結びついていました。しかし、現在では品種の多様化や、施設栽培、輸入品によって野菜・果物は年間を通して供給されています。冬にトマトを食べることの善し悪しは別として、2月でも先程ご紹介した平成7年の献立に見られたように、27種類の野菜を食卓にのせて変化をつけることができるのです。生産性も向上し、変化に富んだ食生活を享受できるようになりました。このために指導・研究・努力をされた国の試験場をはじめとする皆様に感謝したいと思います。

それでは、新たな百年に向けて国の園芸試験場に期待されるものは何でしょうか。既に多くの研究が新たな百年に向けてスタートしているのは、とても頼もしいことだと思います。野菜・果物は多彩な彩りと歯触りで食事を楽しく豊かにします。お茶や花きもそうです。さらに近年、野菜・果物・お茶から種々の機能性成分が見いだされ、各種疾病やガンの予防に効果的であることがわかってきました。アメリカではガンと食物に関する研究成果を数年間かけて検討し、それらをまとめた結果に基づいて1997年にガンを予防する14カ条を発表しました。その14カ条の中の第1条には食事の基本として、「植物性食品を中心に栄養学的に適切で多くの種類を食べるようにする」を公衆衛生上の目標に挙げています。個人へのアドバイスは「野菜・果物・豆類・余り精製されていない穀物を多く摂るように心がけること」です。そしてその第4条には「1年を通じて総エネルギーの7%以上を多種類の野菜・果物で摂るようにすること」を公衆衛生上の目標にしています。そしてこれを実践するための個人へのアドバイスは、「多種類の野菜・果物を1日400～800グラム、あるいは1日5品目を目標として数年食べること」です。アメリカではこれより先に発表した国民のためのフードガイドピラミッド、つまり毎日の食品摂取ガイドでも、野菜・果物は重要な食物と位置づけ、野菜を1日3～5サービング、果物を2～4サービング取るようにと奨めていました。さらにアメリカでは、食生活改善のプログラムとして「5 A DAY」運動をスタートさせ、健康のために野菜・果物を1日5サービング以上摂ることを提唱しています。日本では平成11年の国民栄養調査の結果によれば、緑黄色野菜・その他野菜・果実あわせて、国民1人1日当たり平均409.7グラム摂取しています。これも昭和34年の国民栄養調査の結果を見ると現在とは分類法が違っておりまして、緑黄色野菜・その他野菜・乾燥野菜・漬物・カンキツとトマト・果物となっており、それらを合計す

ると248.3グラムでした。昭和34年から平成11年までの40年間に、248.3グラムから409.7グラムに増えたことになります。この409.7グラムは、アメリカで1997年に発表されたガンを予防する14カ条の中の第4条「1日に400～800グラム食べよう」という目標をクリアしているようにみえます。しかしこれはあくまでも日本人全体の平均値であり、また内容を詳しく見ると若年層に摂取量が少ない傾向がみえますので、手をこまねているわけにはいきません。平成12年には文部科学省・厚生労働省・農林水産省が合同で「食生活指針」を決定し公表しました。全部で10項目ありますが、その5項目には「野菜、果物、牛乳・乳製品、豆類、魚なども組み合わせて」と書かれています。そして実践のために、「たっぷりの野菜と毎日の果物でビタミン・ミネラル・食物繊維を摂りましょう」と提案しています。このように食生活における野菜・果物には追い風が吹いています。しかし、近年、日本の農業を取り巻く環境には非常に厳しいものがあります。まず、価格の点で海外から輸入されるものに太刀打ちできないことです。価格競争で負けます。輸入品に対抗する方法の一つとして、消費者の安心を得ることだと思います。現在のところ消費者は国産の園芸作物に信頼感を持っています。その証拠に同じ野菜が、輸入されたものとそれよりも値段の高い国産野菜とがスーパーマーケットに隣り合わせで並んでいます。国産野菜が売れるのでスーパーマーケットは並べているのだと思います。この信頼を失うことのないようにして欲しいと思います。今ほどこの当たり前のことが強く意識されたことはなかったのではないのでしょうか。国がいくら安全ですと言っても、消費者は安心して牛肉を買うということをしません。農林水産省はこのたび消費者に軸足を置くという方針を打ち出しました。消費者が「安全である」と安心して食べられるようになるとしたら嬉しいことです。そのための独立委員会を新設するということですが、この委員会は真に独立した機関でなければ消費者は安心できません。真に独立ということは農林水産省とも厚生労働省とも別の組織であり、その組織が独自に消費者に向けて報告できることを意味します。しかも、早い時期に警告を消費者に向けて発する必要があります。検討されている委員会は、農林水産省・厚生労働省に対して勧告を行うようになっているようですが、もしそうであれば、どのような勧告を行ったかということを消費者に知らせて欲しいと思います。日本の風土からすると勇気を持って発言することは難しいかもしれませんが、日本全体が少しずつ変わっていくと良いと思います。今協議されている委員会がどのような形になるのかは知りませんが、安全を確かめたり、危機を予測したり、また監視したりするのに、種々の分析や検査

の技術に関する知識があり、情報を集め分析できる研究者のグループが必要です。このようなときに、ここの研究機関の研究者は必要とされ、また応えるべきであると思います。そのための情報・知識・技術のノウハウをきちんと蓄積することをお願いします。そしてそれらが正しく示され、公表されるべきであると思います。このほかにも、さらに種々の面から環境に対する負荷の低減が望まれます。安全な食べ物のために低農薬化も望まれるでしょう。加工品に必要なない添加物もなるべく避けたいものです。消費者の教育も必要であると考えます。消費者の一人として、また、生活という視点を重視する学会の会員の一人として、私も消費者の教育に関して謙虚に反省をしなければなりません。消費者が次に食物に求めるのは品質です。野菜・果物の品質はおいしさと、一般には鮮度です。消費者の嗜好に合ったものに向けて品種の改良や栽培方法の研究が望まれるでしょう。これまで消費者の嗜好といわれていたものの一部は、多分に流通段階にいう消費者の嗜好だったのではないかと思います。実際に消費者の嗜好に合ったものが求められています。一方、消費者の啓蒙が必要な部分もあると思っています。消費者はその作物の本当のおいしさを知らない可能性があります。土壌、その他良い条件で栽培し、最も良い時期に採取して完熟品を消費者に届け、これはこんなにおいしいのだということを消費者に知らせるようなシステムも必要だと思います。旬や地域特性の見直しが起こるかもしれません。旬の時期の完熟品を消費者に届けるために、生産地と消費地を直結するようなシステムができれば、可能になるのではないかと思います。消費地に近いのは海外より国内ですから、国内産の野菜がそれだけ有利になり、輸入品に対抗できる手段となるかもしれません。聞くとところによりますと、UPOV（ユーポフ）の改正で、日本で優良品種を開発すれば、その品種はある一定期間価格差が縮小することになるということです。これも中国からの輸入品に対抗できる手段になりそうです。また食物の品質の中には、栄養素や人体に対する効果も含まれます。私は食べ物はすべて機能性があると思っていますが、消費者の健康に対する関心の高いことを考えると、これに向けての研究開発も期待されます。食生活の指針とあわせ、このことが一層消費者の注目を集め、自分の食生活に取り入れるきっかけになると思われるからです。野菜・果物について主にふれましたが、お茶についても事情はそれほど変わらないのではないかと思います。花きは食物ではありませんから、生活の潤いや楽しみの要素が強くなります。切り花に一世帯が1年間にどのくらい支出しているか、総務庁の家計調査年報で調べてみたら、昭和60年には7,952円でした。これが平成11年

には12,094円に増加しています。切り花の物価指数はこの間に1.29倍になっております。これを勘案すると、実質の支出は10,261円～12,082円となり、なんと14年間に17.8%も増加しています。この間の消費支出は1.1%の増加ですから、いかに切り花に対する支出が増えたかわかります。ちなみに嗜好品といえるビール・焼酎などを含めた酒類に対する支出は、昭和60年に48,141円、平成11年に50,978円で、こちらと比較しても消費者が切り花を購入する機会が増加したことを示しています。特に50歳以上の世帯で購買意欲が高くなっています。これは仏花－仏様にお供えする花－かなとも思いました

けれども、平均値がこれだけ増えているということはやはり全体に切り花を買う機会が増えていると考えざるを得ません。この傾向は今後も続くのではないかと期待されます。

以上とりとめのないことを申し上げました。以上のことを考えあわせますと、新たな百年は課題がたくさんあるけれども、それだけ期待も大きく、成果が求められる百年と考えられます。消費者は独立行政法人となった研究機関に大いに期待しています。釈迦に説法とは存じますが一言申し上げました。お聞き苦しい点は今日のおめでたい会に免じてお許し頂きたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

園芸試験場沿革史

明治35年 6月(1902)	農事試験場園芸部創設（静岡県庵原郡興津町）
明治39年 3月(1906)	見習生制度の開設（現在の農業技術研修制度）
大正10年 4月(1921)	園芸試験場として独立
昭和13年 3月(1938)	園芸試験場東北支場設置（青森県南津軽郡藤崎町）
昭和18年 6月(1943)	神奈川県二宮町に育苗育成地を設置
昭和22年 8月(1947)	園芸試験場九州支場設置（福岡県久留米市）
昭和22年12月(1947)	園芸試験場本場は興津町から神奈川県中郡大野町（現平塚市）へ移転。 興津は、園芸試験場東海支場と改称
昭和25年 4月(1950)	園芸試験場は農業技術研究所園芸部（東京都北区西ヶ原） および地域農業試験場園芸部（東北農試・東海近畿農試・九州農試）へ整理統合
昭和36年12月(1961)	園芸試験場本場（平塚市・興津町）の設置 および支場（盛岡市・久留米市）の設置
昭和39年 4月(1964)	園芸試験場口之津試験地開設（長崎県南高来郡口之津町） 園芸試験場興津支場に変更
昭和43年 4月(1968)	園芸試験場安芸津支場設置（広島県豊田郡安芸津町）
昭和48年 1月(1973)	園芸試験場は、果樹部門とそ菜・花き部門に分離。果樹部門は果樹試験場（平塚市）として発足。口之津試験地は果樹試験場口之津支場として発足。 そ菜・花き部門は東海近畿農業試験場を統合し、野菜試験場（三重県津市一身田）として発足。支場を盛岡と久留米に配置。 東海近畿農試畑作部（愛知県知多郡武豊町）は野菜試験場施設栽培部となる
昭和56年11月(1981)	果樹試験場本場を茨城県筑波郡谷田部町（現つくば市）の筑波研究学園都市へ移転
昭和61年11月(1986)	野菜試験場本場が津市一身田から安濃町へ移転
昭和61年12月(1986)	野菜試験場と茶業試験場が統合し、野菜茶業試験場として発足。花き部の新設
平成 8年10月(1996)	果樹試験場は興津・口之津両支場を統合し、カンキツ部として発足 盛岡支場をリンゴ支場、安芸津支場をカキ・ブドウ支場に改称
平成13年 4月(2001)	独立行政法人農業技術研究機構に再編 果樹研究所（つくば市・盛岡市・興津町・口之津町・安芸津町） 野菜茶業研究所（安濃町・武豊町・金谷町・つくば市） 花き研究所（つくば市・安濃町） 東北農業研究センター野菜花き部（盛岡市） 九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部（久留米市）

園芸試験場
百周年記念

園芸試験場百周年つくば記念行事



平成14年6月21日に果樹研究所共用大会議室において、研修生OB及び職員OBなど80名余と果樹研究所及び花き研究所職員約100名余の合計180名を超える大勢の方々と、つくばにおける園芸試験場百周年を祝った。

会場には、研究成果も展示し、所内を見学するOBの姿も目についた。

記念行事

記念行事では、眞田哲朗遺伝育種部長の発声による開会の辞で始まり、間亭谷徹前果樹試験場長による記念講話があった。間亭谷氏は、園芸関係の試験研究機関（果樹研・野茶研・花き研）が独立の試験研究機関として今後とも機能することが園芸界の隆盛に関わることでであると強調された。

近況報告では、果樹研究所の歴史の変遷と試験研究の今後の取り組みについて、駒村研三企画調整部長からの報告があり、続いて花き研究所の現状と将来の展望について、浅野次郎花き研究所長が報告された。

思い出話では、最初に、果樹試験場時代の育種第3研究室長と盛岡支場長を歴任された吉田雅夫氏が、つくば移転当時の苦労話をエピソードを添えながら話された。

続いて、研修生OB3人が思い出話をされ、昭和53年度卒中村信明氏は、平塚への入場当時（入場は平塚）の寮の様子や職員との親睦が楽しく有意義であったことを話され、当時の様子が浮き彫りにされた。

昭和57年卒の庄司敬一氏は、果樹試験場の研修生になった時の経緯とその後の寮生活の様子を懐かしさを込めて話され、最後に、平成12年卒の中澤葉子氏が1年先輩研修生へのインタビューという形を織り交ぜながら楽しく話を盛り上げた。研修生OB3人の共通した点はだれもが、よくお酒を飲んだこと（飲まされたことも含め）でした。

そして、最後に、福元将志生理機能部長の閉会の辞で閉会となった。

引き続き、立食パーティーは、佐藤義彦遺伝資源研究室長の司会で、梅谷献二元果樹試験場長の乾杯の音頭で始まった。当初は、研修生OBの近況報告を予定していたが、パーティーがあまりにも盛況であったために、近況報告を行うことはできず、どの場においても、思い出話に花が咲き続けていたが、最後に村井保生産環境部長の力強い一本締めで締めとなった。



園芸試験場
百周年記念

「平塚桜会祝賀会」 快晴に恵まれ盛会に



園芸試験場創立100周年を記念して、去る6月19日(水)園芸試験場百周年記念「平塚桜会祝賀会」が開催された。

昭和22年12月から52年12月までの30年間、園芸復興期から発展期へと大きな足跡を残した平塚の地で、同期の方々、寮仲間、新旧職員等々、北海道から鹿児島まで、全国津々浦々から156名が100周年を祝い、旧交を温めるため、平塚JAビル「平塚プレシール会館」に集った。

平塚に思いを馳せる諸先輩の思いが通じたのか、前日の大



雨とは打って変わって当日は快晴に恵まれ、名前は、顔は、当時の面影はと、園芸に賭ける情熱を込めながら「久しぶり」といって、30年、40年ぶりに顔を合わせた人々でした。

祝賀会は吉田雅夫氏の司会で開会、今は亡き桜会諸先輩に黙祷を捧げた後、中村浩園芸担当理事から「平塚の思い出」を、駒村研三果樹研究所企画調整部長から試験研究の近況を話し、次いで桜会有志の話として、果樹関係職員OB志村勲氏、野菜関係職員OB内海修一氏、研修生OB高橋栄治氏、小川重則氏の各氏から、それぞれの時代のエピソードを交えた「平塚の思い出話」に一同聞き入った。

懇親会は高橋栄治氏の司会で進められ、数多くの会員に平塚の思い出話などを話して頂き、海軍火薬廠跡地であった園試をトロッコを使って開園した当時を思い出しつつ、「数え唄」をトロッコ会の有志が披露し、一段と盛り上がったところで名残の尽きないままお開きとなり、跡地見学会に向かった。

今は平塚市民の憩いの場となっている平塚市総合公園「旧園芸試験場跡地」は、平塚桜会出身者には青雲の志を持って過



した忘れがたい地。参加者の七割近い人が、鷺塚や園芸試験場跡の碑、思い出多き食堂や寮の跡地などを訪ねた。

さらに同窓会、二次会へと、青春の地、平塚に感慨ひとしおの一日となった。

園芸試験場
百周年記念

盛大に興津地区で記念行事

園芸試験場の前身である農事試験場園芸部が1902年に開設された地であるカンキツ研究部(興津)では、6月21日に一般公開・記念式典・記念講演会と興津桜会同窓会が開催された。場内の一般公開・研究展示は9時から12時であったが、開始を待ちかねて多くの旧職員・研修生がマイクロバスで来場さ

れ、若き日に草刈り・葉散・収穫等に汗を流した中山や浅間山のミカン園を歩いて回り、研修棟の研究展示室では最近の品種系統・機能性等の研究内容を興味深く見学されていた。場内見学を終えてから、在場当時お世話になっていた近くの下宿を訪問された方も多かった。午後には東静岡駅隣のグラ

ンシップで、1時半から百周年記念式典、3時から記念講演会が開催された。記念式典では、梶浦一郎果樹研究所長の挨拶があり、伊庭慶昭元企画連絡室長が「園芸試験場百年の歩み」と題して組織の変遷や園芸研究の歴史を紹介された。舞台のスクリーンに次々と昔懐かしい風景・人物・行事等の写真が映し出され、会場の桜会OB達はそれぞれの想いを胸に熱心に見入っていた。

記念講演会では、高辻豊二カンキツ研究部長の趣旨説明に続いて、京都府立医大の吉田俊秀助教授が「肥満研究の最前線」と題して生活習慣病の予防における食生活の重要性を分かりやすく説明され、続いて矢野昌充上席研究官が「ミカン大好き人間は健康か」と題してカンキツ類には健康増進に有効な多くの機能性成分が含まれ健全な食生活にはその摂取量を増やすことが望ましいという研究成果を紹介された。会場を埋めた約500名の参加者からは、カンキツ農業が停滞している中で関係者を勇気づける時宜を得た講演会と好評であった。

講演会の後は、同施設の交流ホールで興津桜会同窓会が開催された。生駒吉識室長の司会、廣瀬和榮元支場長の挨拶で始まった祝宴では、小崎格・上野勇元場長を始め、全国から



参集した約320名の桜会関係者が懐古談や近況報告に時間の経つのを忘れた。参加者の中には昭和12年卒の大長老を始め戦前卒業の先輩もかなり出席されており、五十周年記念式典(昭和27年)の思い出を話される方や名曲「興津のおの字」の作曲者という方もおられた。久しぶりの再会で全て語り尽くすには短かすぎる宴ではあったが、かつて同じ釜の飯を食った先輩後輩が入り交じって大いに賑わった。

何はともあれ多彩な行事を無事盛会裏に終えることができ、2年間の準備と煩雑な当日業務に快くご尽力いただいた職員・パート・研修生の皆さんに心より感謝の意を表したい。

園芸試験場 百周年記念

口之津における百周年記念行事盛大に

カンキツ研究部口之津においては、6月21日、22日に口之津桜会総会と連動して以下の記念行事を実施し、特に記念講演会には248名の参加者があり、大変盛況であった。

①記念講演会：21日13時～17時まで、口之津中央公民館において、口之津桜会会員を中心に、各県の試験研究者、改良普及員、団体の技術者等248名の参加者で開催された。まず式典に代わる挨拶を、工藤晟前カンキツ研究官、松村博伸口之津桜会会長、来賓として三原松朗口之津町長の3氏からそれぞれ頂いた。続いて記念講演会を行い、元口之津支場長の河瀬憲次氏より「21世紀におけるカンキツ農業の展望」について、熊本果実連河内選果場長の上口政信氏より「光センサー選果機を利用したカンキツ流通販売戦略」について、それぞれお話頂いた。続いて、「カンキツの品種・栽培・病害・虫害に関する最新情報」について、吉岡育種研究室主任研究官、高原栽培生理研究室長、伊藤病害研究室長、大平虫害研究室長より報告がなされた。このように、記念講演会は盛り沢山の内容であったが、大変好評であった。

②研究所内見学会：21日と22日の午前中に実施され、200名

余の見学者があった。

③研究成果の展示：講演会が開催された口之津中央公民館ロビーでパネルで発表し、好評であった。

④果実試食会：22日午前に口之津で育成した主要品種を中心に、冷温高湿貯蔵庫で貯蔵した果実について試食を行った。

⑤記念祝賀会：21日18時より、口之津年金健康保養センターで124名の参加者のもとに盛大に行われた。



研究の紹介

果肉が黄色で甘味が多いクリ新品种 ‘秋峰’

遺伝育種部 ナシ・クリ育種研究室 齋藤 寿広

■育成経過

1983年に‘筑波’に‘524-1’を交配した交雑実生から選抜した。1992年に開始したクリ第5回系統適応性検定試験に、‘クリ筑波35号’の系統名で供試して17都府県19の試験研究機関の協力を得て特性を検討した。その結果、‘筑波’と‘石鎚’の間に収穫されるやや晩生の、果実品質が優れる系統として有望であることが認められ、2001年10月9日付けでくり農林7号‘秋峰’と命名公表された。現在、種苗法に基づく品種登録を申請中である。

■特性の概要

樹姿は開張性で樹勢は中である。枝梢は褐色で発生程度、長さおよび太さいずれも‘石鎚’と同様中程度である。発芽期は‘筑波’と同時期で、雌花の開花期は6月上旬で‘筑波’および‘石鎚’と同時期である。

収穫期は9月下旬～10月上旬で、‘筑波’と‘石鎚’の間であるが、年によっては‘筑波’と重なる場合もある。雌花の着生性は中である。

きゅう果は扁球で‘筑波’や‘石鎚’よりやや小さい。側果並びに中果の側面は帯円三角形であり、果実の大きさは23g程度で‘石鎚’より小さいが揃いは良い方である。果皮色は暗褐色で果皮の毛じは多い。果実の比重は平均1.08で高く、肉質は粉質である。果肉色は黄色であり‘筑波’や‘石鎚’より優れ、甘味及び香気は多く、食味良好である。また、

果皮並びに蒸しぐりとしたときの渋皮の剥皮性の難易はともに‘石鎚’と同程度で‘筑波’より優れる。裂果及び双子果の発生はともに少ない。結果性は中程度でこれまで行った若木の成績から判断すると‘筑波’及び‘石鎚’より若干少ない。

■適応地域と将来性

‘筑波’及び‘石鎚’の収穫期を補完する品種として、関東以西のクリ産地での普及が期待される。本品種は現在の主力品種である‘筑波’や‘石鎚’と比較して食味が優れていることが特徴であることから、従来の‘利平ぐり’の例に見られるような生産物の差別化による収益の増大が期待できる。また、果肉色が優れていることから加工原料用を目的とした栽培も可能である。

■命名の由来

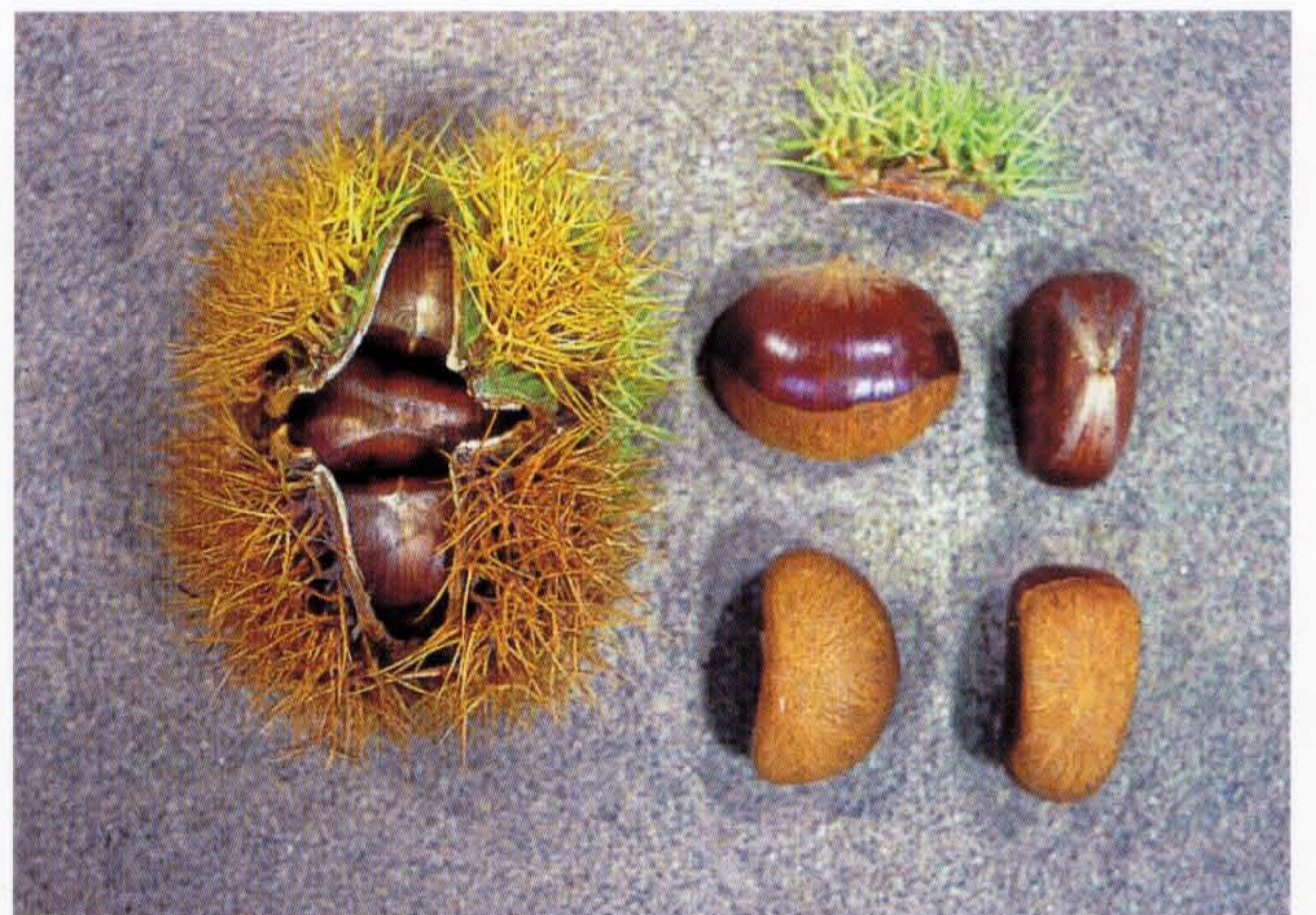
収穫期である秋と実り豊かな山をイメージして名付けた。

■育成者

町田 裕、梶浦一郎、壽 和夫、佐藤義彦、増田亮一、阿部和幸、栗原昭夫、緒方達志、齋藤寿広、寺井理治、西端豊英、正田守幸、檜村芳記、澤村 豊、小園照雄、福田博之、木原武士、鈴木勝征



秋峰の結実状況



秋峰の果実

研究の紹介

白くて玉張り良好なモモ新品種 ‘白秋’

遺伝育種部 核果類育種研究室 土師 岳

■育成経過

モモ新品種 ‘白秋’ は、着色を抑えた白い果実の生産が容易な生食用品種である。交雑は1979年に果樹研究所千代田試験地で行い、種子親には ‘う-9’ (‘白桃’ × ‘布目早生’)、花粉親には米国からの導入系統である ‘C2R19T182’ を用いた。得られた実生は苗圃で養成した後、1981年12月に個体番号「153-15」を付けて育種圃場に定植した。初結実は1983年で、果実が大きく食味も比較的優れていたため1986年に注目系統として選抜した。その後1992年より「モモ筑波113号」としてモモ第7回系統適応性検定試験に供試し、岡山県など21場所の参加により特性調査を進めた。その結果、大玉で果皮着色が少なく、生理落果の少ないことが明らかになり、着色抑制栽培に適した優良品種と判断されたため、2001年にも農林23号 ‘白秋’ として農林登録された。現在種苗法に基づく品種登録を申請中である。

■特性の概要

樹勢は中から強で、樹姿は開張性と直立性の中間になる。新梢は中程度に発生し花芽の着生はやや多い。花は単弁普通咲きで花粉を有し、自家結実性で生理落果は少ない。開花期は ‘あかつき’ の2日程度後で、収穫期は ‘あかつき’ の2～3週間後になる中生品種である。果実は円形で果実重は300～400 g の大玉品種である。果皮は地色が乳白色で着色が少なく、遮光袋を用いるとほぼ完全に着色を抑制した白い果実を生産できる。なお裂果や肌荒れは発生しない。果肉は白色で

紅色素の発生は少なく、肉質は溶質でやや密であり果汁が多い。糖度は11～13%、pHは4.5～4.8で、渋味の発生はなく、食味は比較的優れている。核は粘核である。

■栽培上の留意点及び適応地域

我が国のモモ栽培では一般に果面全体に着色させているが、岡山県など一部の産地では果皮着色を抑制する栽培が行われている。これらの産地では果皮着色の少ない ‘清水白桃’ や ‘白桃’ を利用しているが、いずれも生理落果の多いことが問題となっている。‘白秋’ は着色抑制が容易なうえ、大果で結実が安定していることから、着色抑制栽培を行う地域での普及が期待される。本品種は収穫期に降雨が多いと糖度が低下しやすいため、糖度の上昇を図れる条件下での栽培が望まれる。またせん孔細菌病や灰星病などには罹病性のため防除対策を講じる必要がある。

■命名の由来

果実が白くきれいなこと、育成地では立秋すぎに収穫されることが命名の由来である。

■育成者

山口正己、京谷英壽、
吉田雅夫、土師 岳、
小園照雄、西村幸一、
八重垣英明、中村ゆり、
三宅正則、鈴木勝征、
木原武士、福田博之



白秋の結実状況



白秋の果実

平成13年度果樹試験研究推進会議

トピックス

平成14年 2 月20日(水) ～21日(木) に、果樹研究所では、果樹研究所及び関係機関の研究室長、指定試験主任、関係法人、研究所、行政部局、県試験場及び2名の評価委員の出席を得て、平成13年度果樹試験研究推進会議本会議、試験研究推進部会及び評価企画会議を開催した。

試験研究推進部会では平成13年度重要研究問題「果実のある生活創造、消費拡大に資する果樹研究の重点化方向」を取り上げ、検討した。果樹研究所では13年度の重点ターゲット「健康で豊かな生活を創造する花と果実の開発」に基づき、果実の健康機能性研究についてカンキツやリンゴの機能性成分解明と健康増進効果を明らかにしつつ研究成果の公表に努めている。そこで試験研究の重点的強化、成果の普及などにおける試験研究機関の担う役割と関係機関との連携方策について問題点を整理した。これらの検討を踏まえて14年度農研機構の果樹分野の重点スローガンにつなげ、試験研究の重点的推進を図ることとした。20日午後から21日午前にかけて育種、栽培、病虫害の各部会に分かれて平成13年度の主要研究成果の検討などを行った。また、21日午後から開催した評価企画会議では試験研究推進部会の各部会において検討・採択された主要研究成果候補課題について課題ごとに評価し、最終的に37課題を平成13年度果樹主要研究成果として採択した(表)。

なお、本年度から主要研究成果の、成果の活用面から見た性質に応じて、「技術」、「科学」、「行政」の3種類に分類し、さらに「普及に移しうる成果(普及)」と「その他参考となる成果(参考)」のいずれかに区分することとした。

■平成13年度の果樹研究における主要研究成果

番号	成 果 名	担 当 部 ・ 研 究 室	種 類			区 分	
			技術	科学	行政	普及	参考
1	自家和合性の後代を効率的に獲得できる「ナシ中間母本農1号」(266-27)	遺伝育種部・ナシ・クリ育種研		○		●	
2	早生で食味良好な完全甘ガキの新品種「甘秋」(カキ芸津14号)	ブドウカキ研究部・育種研	○			●	
3	オウトウ品種・系統の自家不和合性遺伝子型の判定	山形園試・パイオ育種部	○			●	
4	果肉が軟らかく、甘味の多い早生のピワ新品种「麗月」(ピワ長崎7号)	長崎県果樹試験場・育種科	○			●	
5	高温の食用油に浸漬して行う効率的なクリの渋皮剥皮法	遺伝育種部・ナシ・クリ育種研	○			●	
6	中間台木方式によるモモ台木接ぎ木親和性の早期判定	遺伝育種部・核果類育種研	○				●
7	エチレン処理による硬肉モモの軟化とエチレン生成	遺伝育種部・核果類育種研		○			●
8	CiFT 遺伝子の導入による早期開花性カラタチの作出	カンキツ研究部・遺伝解析研		○			●
9	カンキツ類における「無核紀州」に由来する雌性不稔性の遺伝様式	カンキツ研究部・素材開発研		○			●
10	米国及び欧州ブドウにおける肉質の変異	ブドウカキ研究部・育種研		○			●
11	日本及び中国の渋ガキ品種における脱渋の難易性	ブドウカキ研究部・育種研		○			●
12	「西村早生」と完全甘ガキとの交雑からは、完全甘ガキの子は生じない	ブドウカキ研究部・育種研		○			●
13	完全甘ガキにおけるへたすき果発生程度の品種・系統間差異と年次変動	ブドウカキ研究部・育種研		○			●
14	リンゴジベレリン20 (GA20) 酸化酵素遺伝子の単離と発現解析	生理機能部・形質発現研		○			●
15	モモ果実の肥大に関連するエクスパンシン遺伝子の単離	生理機能部・栽培生理研		○			●
16	Myb様転写制御因子は「巨峰」のアントシアニン合成に深く関わっている	ブドウカキ研究部・上席研		○			●
17	カキへのおい化遺伝子導入によるおい性組換え体の作出	ブドウカキ研究部・栽培生理研		○			●
18	リンゴ成熟果実からの高収率なプロトプラスト単離方法	生理機能部・品質化学研		○			●
19	冷温高湿貯蔵によるカボス、ニホンナシ、オウトウの長期鮮度保持	生理機能部・品質化学研	○			●	
20	水分損失によるカキ果実の品質劣化	ブドウカキ研究部・栽培生理研		○			●
21	リンゴ摂取による血液中の中性脂肪減少、ビタミンC増加、腸内細菌叢改善	生理機能部・品質化学研			○	●	
22	ミカン摂取量が推定できるヒト血清中のバイオマーカー	カンキツ研究部・品質機能研		○			●
23	ミカンを多く摂取するヒトにおける酸化ストレスと血清脂質の変化	カンキツ研究部・品質機能研		○			●
24	ウンシュウミカン摂取頻度と疾患罹病に関するロジスティック回帰分析	カンキツ研究部・品質機能研		○			●
25	果樹園の養分収支の推定	生理機能部・根圏機能研			○		●
26	暖房・換気交互制御による加温施設内オウトウの裂果防止装置	生理機能部・環境応答研	○			●	
27	ウイルス類の無毒化によるカンキツ「不知火」の樹勢強化と品質向上	カンキツ研究部・栽培生理研	○			●	
28	カラムナータイプリング樹の光合成能の特徴	リンゴ研究部・栽培生理研		○			●
29	ウメ樹「南高」における果実生産と樹体内養水分バランス	和歌山農総技・暖地園芸セ・うめ部		○			●
30	傾斜地カンキツ園における園内雨水利用システム	近中四農研・総合研究部・総研第2チーム	○			●	
31	種々の台木におけるカンキツ類の光合成と果実品質	近中四農研・特産作物部・果樹研		○			●
32	カンキツがいよう病菌の宿主特異的な病原力発現に関与する遺伝子	カンキツ研究部・病害研		○			●
33	カンキツウイルス(CVd)-I-LSS及びCVd-OSの塩基配列	カンキツ研究部・病害研		○		●	
34	RT-PCRによるリンゴゆず果ウイルスの診断	リンゴ研究部・病害研		○	●		
35	わが国に発生する主要なブドウウイルス9種の遺伝子診断法	ブドウカキ研究部・病害研		○	●		
36	ミカンハダニ卵上に残された捕食痕に基づく天敵種の識別法	生産環境部・虫害研		○		●	
37	立木と集合7i0Eヲを利用した果樹カメムシ類の効率的な天敵微生物接種法	福岡農総試・病虫害部・果樹病虫害研	○				●

平成14年度果樹研究所一般公開

トピックス

第43回科学技術週間における農林研究団地の一般公開は、4月17日(水)午前10時～午後4時まで各研究所等で開催された。果樹研究所は、「果物から健康へのアプローチ」をテーマに、健康の増進に役立つ果物の機能成分を詳しく紹介した。

今年的一般公開も昨年に引き続き花き研究所と合同で開催し、第1会場ではモモの接木体験の実習を行った。第2会場では今回初めての実施となるミニ講演会「リンゴ摂取による健康増進効果」を実施し、好評を得た。そのほか、園芸研究100年の歩み、機能性研究、遺伝資源、育成品種等を紹介し、シイクワシャージュースの試飲も行い機能性の宣伝をした。その後、八重桜並木をとおり、第3会場では、果物・花展示とそれぞれの研究紹介を行い、技術相談、昆虫等の展示、研修生による果樹農業の展示、体験コーナーとして「果物でオルゴールを聴く」の実験を行い、プレゼントとして、カンキ

ツ新品種「はるみ」や花き研究所からも、マリーゴールドの苗を配布した。また、第3会場入口では、桜茶の試飲も行った。

参加者からアンケートを取ったところですが、説明者の対応がよかったという感想を多くいただき、今後ともこのように工夫をしつつ続けていきたいと考えている。

当日は、天気が心配されたが、雨は降らなかったものの強い風に悩まされ

た1日であった。

一般公開には1762名の参加者があり、盛大に終えることができた。



果物でオルゴールを聴く

研究所評価委員会

トピックス

独立行政法人発足後初めての果樹研究所評価委員会は、平成14年4月25日に花き研共用大会議室において開催され、法人化初年である13年度の果樹研究所の組織・運営及び研究課題の進捗状況について、農業技術研究機構中期計画に照らし評価が行われた。委員会は、千葉大農学部松井弘之教授を委員長に、広く外部から農業生産者、農業団体、公立試験研究機関、消費者団体、流通団体等の関係者、学識経験者、県行政担当者、農水省行政担当者、その他有識者の計10名の評価委員で構成された。

評価委員会では、果樹研究所の組織・運営については、企画調整部など研究支援部門の拡充と都道府県研究機関との連携強化等が指摘され、また長期的視野に立った基礎的研究のさらなる推進体制の整備を求めている。また、研究課題の進

捗状況評価では、3つの大課題ともおおむね計画通りに進行しているとの評価を得たが、遺伝子組換えも活用し有望な品種を早期に育成する様に要望されると同時に、安全性評価にも重点を置くように指摘された。また、臭化メチル全廃に向けたクリシギゾウムシ防除法の確立や、農薬を低減させる天敵昆虫や微生物を用いる方法の確立など、安全な食料の生産に向けた課題に一層重点を置くよう要望された。果樹研究所では、これらの指摘を受け、今年度の研究遂行や今後の組織運営に反映するよう努めている。

また、研究課題については、中期計画に沿い大課題ごとに映像を使って説明したが、研究に携わった経験がない外部の委員にとっては短時間では理解が困難との指摘もあり、よりわかりやすい説明・工夫が来年に向けた検討課題とされた。

サイエンスキャンプ

トピックス

2002年のサイエンスキャンプは、8月6～8日に開催され、北は宮城から南は宮崎まで、12名の高校生が参加して開催された。今回は例年と比べ、宿泊先が筑波事務所の国内研修生宿泊施設と変更になった。

1日目は午後から開講式を行い、挨拶・紹介等をした。開講式終了後は、業務科長が施設・圃場等の案内を行い、その後「DNAでナシの品種を判定してみよう」のタイトルで、ナシ5品種のDNAを調べ、品種を判定する実験を遺伝資源研究室が行った。マイクロピペッターの使い方から始まったが、初めて使う器具に当初はとまどったもののすぐに慣れ実

験を進めた。次に「くだものおいしさを科学する」というタイトルで、品質化学研究室が、糖や酸の味覚についての調査等を行った。微妙な味の違いを真剣に調べて実習が進んでいった。1日目終了後は、野外でバーベキューを行い交流を深めた。

2日目午前中は、「酵素のはたらきを調べてみよう」というタイトルで栽培生理研究室が担当し、果実に多く含まれているプロテアーゼという酵素についての実験を行い、その働きや性質を調べた。午後には、昨日に引き続きDNAの実験と「いろいろなモモ」というタイトルで、核果類育種研究室

がモモの育種圃場や調査室を使って、珍しいモモを含め測定や食味を行った。2日目の実習が終了した後は、高校生が希望した研究室の訪問を行い、聞いてみたいことや不思議に思っていることを研究室に行き話してもらった。実習の関係で、1時間しか研究室訪問の時間がとれなかったため、中にはもっと聞きたいという高校生もいたようだった。

最終日となる3日目は、午前中にDNAの最後の実習と、「カメムシの天敵・卵寄生バチの不思議」というタイトルで、寄生バチがカメムシの卵に産卵する瞬間を観察したり、電子顕微鏡を使って産卵された卵の状態の観察を行った。午後からは、ディスカッションを行い、高校生からサイエンスキャンプの感想や質問が出された。ディスカッション終了後は、閉講式を行い、所長から受講生全員に修了証を渡し、今年度のサイエンスキャンプが無事に終了した。

サイエンスキャンプが行われた3日間は、真夏の暑い日が続き、施設・圃場案内、モモの収穫は暑い中大変であった。この3日間何事もなく予定どおりに終了することができ、付き添いのアドバイザーの先生、科学技術振興財団事務局の方には大変お世話になった。



創意工夫功労者受賞 (2002.4)

「パイプ棚による育種実生の省力的結果促進法の考案」

田口 峻、末續 末光 (カンキツ研究部口之津 業務科)

カンキツの新品種育成のための交配実生は、着花結実するまでに長い年月(10年程度)を要する。従来は、カラタチ台温州ミカン(10年生程度)1樹につき7~8本の実生個体を高接ぎして早期の伸長を促し、1樹毎に管理することで着花促進を図ってきた。しかし、この方式は樹冠内部が混み合うため、新梢管理等が非常に煩雑で管理に多くの時間を必要とした。また、特性調査や果実の収穫においても時間を要したり、棚はパイプハウス用資材を使用していたため、台風等の強風に弱いなど管理面での問題が多かった。

そこで、安価で台風等の強風にも耐え、交配実生の結実を促進し、省力管理ができるように、建設用組み立てパイプと新たな台木を用いた実生成育促進用のパイプ棚を考案し、かつ除草やかん水を極力省力できる育種実生管理方法を考案した。これにより、育種実生苗の結果促進と新梢の誘引、トゲ取り、薬剤散布、除草、かん水等の管理労力が大幅に省力化された。

園芸学会賞奨励賞 (2002.4)

「キウイフルーツの成熟におけるエチレン生成機構の分子生物学的解析に関する研究」

生駒 吉識 (カンキツ研究部 品質機能研究室長)

未熟果実の販売で消費者に敬遠され価格低迷が続いていたキウイフルーツについて、エチレン生成メカニズムの面から成熟を検討し、mRNA抽出法の確立、2種のACC合成酵素と1種のACC酸化酵素のcDNA単離を行った。さらに3種の遺伝子発現と果実内部、エチレン処理の有無、単為結実果と受粉果、エチレン生成の高低の関係を検討し、キウイフルーツ「ヘイワード」でエチレン生成が起こりにくい原因を、ACC合成遺伝子AD-ACS1の発現のしにくさにあることを明らかにし、AD-ACS1の発現のしにくい単為結実果で追熟果の日持ち性の向上の可能性を示した。これら新たな追熟技術の確立・普及と市販果実の品質向上に寄与した優れた業績に対し、平成14年度園芸学会賞奨励賞を授与された。



掲示板



◆人事異動名簿

(平成14年4月1日～平成14年9月1日)

異動年月日	異動事由	新	旧	氏 名
14. 4. 1	昇任	総務部口之津総務分室長	農林水産政策研究所総務部庶務課 人事厚生係長	松本 謙二
"	"	総務部会計課施設管理係長	農林水産技術会議事務局総務課 施設室宿舍管理班 (管理係)	鈴木 正祐
"	"	総務部安芸津総務分室庶務係長	近畿中国四国農業研究センター 総務部庶務課 (人事係)	三嶋 和正
"	転任	総務部長	農業工学研究所総務部長	影山 勝
"	"	総務部会計課専門職 (施設)	農業生物資源研究所総務部会計課 監査官	本間 方生
"	"	総務部庶務課庶務係長	食品総合研究所総務部会計課 審査係長	丸田 理一
"	"	カンキツ研究部品質機能研究室長	農林水産技術会議事務局 研究調査官 (研究開発企画官室)	生駒 吉識
"	採用	総務部安芸津総務分室 (会計係)		安東 優
"	"	総務部会計課 (用度係)		鈴木 崇仁
"	"	カンキツ研究部主任研究官 (栽培生理研究室)	和歌山県農林水産総合技術センタ 一果樹園芸試験場主任研究員	米本 仁巳
"	"	ブドウ・カキ研究部主任研究官 (育種研究室)	福岡県農業総合試験場園芸研究所 主任技師 (落葉果樹研究室)	白石美樹夫
"	"	企画調整部 (研究企画科)		杉浦 裕義
"	"	企画調整部 (研究企画科)		高田 教臣
"	"	企画調整部 (研究企画科)		井上 理央
"	配置換	企画調整部情報資料課長	近畿中国四国農業研究センター 企画調整部四国分室情報資料室長	川口 稔
"	"	総務部会計課審査係長	畜産草地研究所総務部御代田総務 分室会計係長	鯉淵 浩司
"	"	企画調整部 (情報資料課情報管理係)	動物衛生研究所総務部庶務課 (職員厚生係)	谷田部知子
"	"	総務部会計課 (予算決算係)	動物衛生研究所総務部会計課 (調達係)	川田 博行
"	"	総務部庶務課 (職員厚生係)	農業技術研究機構総合企画調整部 (企画調整室企画連絡係)	室田 美玲
"	"	総務部庶務課 (人事係)	動物衛生研究所総務部庶務課 (人事係)	関 良之
"	"	総務部庶務課職員厚生係長	総務部庶務課庶務係長	吉村 正夫
"	"	総務部口之津総務分室 (用度係)	総務部会計課 (会計係)	田中 敏浩

異動年月日	異動事由	新	旧	氏 名
14. 4. 1	配置換	総務部会計課（会計係）	総務部庶務課（職員厚生係）	寺田 勝治
"	"	企画調整部研究交流科長	リンゴ研究部上席研究官	吉岡 博人
"	"	企画調整部主任研究官（研究企画科）	ブドウ・カキ研究部主任研究官 （病害研究室）	島根 孝典
"	"	リンゴ研究部虫害研究室長	企画調整部主任研究官（研究企画科）	高梨 祐明
"	"	農業技術研究機構総合情報管理部 広報課長	企画調整部情報資料課長	平山 立夫
"	"	九州沖縄農業研究センター総務部 庶務課課長補佐	総務部口之津総務分室長	宮本 秀範
"	"	動物衛生研究所企画調整部専門職 （研究交流科交流調整係）	総務部会計課専門職（会計係）	森田久美子
"	"	中央農業総合研究センター総務部 会計課（施設管理係）	総務部会計課（予算決算係）	東館 孝
"	"	近畿中国四国農業研究センター 総務部会計課（予算決算係）	総務部安芸津総務分室（会計係）	若松 正文
"	"	九州沖縄農業研究センター総務部 会計課（施設管理係）	総務部会計課（用度係）	酒井 誠
"	出向・昇任	農業生物資源研究所企画調整部 情報資料課専門職（司書）	企画調整部情報資料課情報管理 係長	福田 直美
"	"	農林水産政策研究所総務部庶務課 人事厚生係長	総務部庶務課（人事係）	森 道治
"	出向	農業生物資源研究所企画調整部 技術移転科専門職（特許管理）	総務部会計課専門職（施設）	鎌田 信義
"	"	農林水産技術会議事務局筑波事務所 総務課調整係長	総務部庶務課職員厚生係長	江原 泰夫
"	"	農林水産技術会議事務局筑波事務所 電子計算課業務係長	総務部会計課施設管理係長	小野 任博
"	"	動物医薬品検査所庶務課庶務係長	総務部安芸津総務分室庶務係長	奥田 勝行
"	"	食品総合研究所総務部庶務課 厚生係長	総務部会計課審査係長	宇野 正志
"	"	国際農林水産業研究センター 総務部会計課（会計係）	総務部興津総務分室（用度係）	秋山 武志
"	"	文部科学省（京都大学大学院助教授 農学研究科地域環境科学専攻）	リンゴ研究部虫害研究室長	刑部 正博
"	"	農林水産技術会議事務局 研究調査官（技術安全課）	カンキツ研究部主任研究官 （栽培生理研究室）	緒方 達志
"	職務復帰	総務部盛岡総務分室（庶務係）	育児休業	鈴木 裕子
"	併任	花き研究所企画調整室研究交流科 情報管理係長兼企画調整部 （情報資料課情報管理係）	北海道農業研究センター 企画調整部情報資料課情報係長	林 水紀
"	退職	勸 奨	総務部長	山口 進
14. 5. 1	配置換	総務部庶務課課長補佐	東北農業研究センター総務部 大曲総務分室長	吉津 泉

異動年月日	異動事由	新	旧	氏 名
14. 5. 1	配置換	畜産草地研究所企画調整部 情報資料第1課長	総務部庶務課課長補佐	岩田 茂
14. 6. 1	"	近畿中国四国農業研究センター 総合研究部主任研究官 (総合研究第2チーム)	生理機能部主任研究官 (品質化 学研究室)	村松 昇
14. 8. 1	配置換	生理機能部 (環境応答研究室)	企画調整部 (研究企画科)	杉浦 裕義
"	"	遺伝育種部 (ナシ・クリ育種研究室)	企画調整部 (研究企画科)	高田 教臣
"	"	ブドウ・カキ研究部 (病害研究室)	企画調整部 (研究企画科)	井上 理央

◆果樹研究会等

(平成14年4月1日～平成14年8月31日)

開催年月日	研究会名	主催機関及び共催機関	場 所
14. 8.25～26	平成14年度寒冷地果樹現地研究会 「寒冷地における果樹の早期成園化 技術の開発と今後の課題」	農研機構果樹研究所	山形県砂丘地農業試験場
14. 7.16	平成14年度常緑果樹系統適応性・特性 検定試験成績検討会	農研機構果樹研究所	長崎空港観光ホテル
14. 10.3～4	平成14年度系統適応性・特定検定試験 現地検討会	農研機構果樹研究所	青森県りんご試験場

◆職員の研修名簿

(平成14年4月1日～平成14年8月31日)

研 修 名	氏 名	所 属	期 間	備 考
第36回国家公務員合同初任研修	高田 教臣	企画調整部	14. 4. 2～14. 4. 5	総務省及び人事院
"	杉浦 裕義	"	"	"
"	井上 理央	"	"	"
平成14年度Ⅰ種試験採用者研修	高田 教臣	企画調整部	14. 4. 8～14. 4.12	農林水産研修所
"	杉浦 裕義	"	"	"
"	井上 理央	"	"	"
平成14年度Ⅰ種試験採用者専門 研修 (研究職コース)	高田 教臣	企画調整部	14. 4.15～14. 4.18	農林水産技術会議 事務局
"	杉浦 裕義	"	"	"
"	井上 理央	"	"	"
"	立木 美保	生理機能部	"	"
平成14年度Ⅱ種・Ⅲ種試験採用者	安東 優	安芸津総務分室	14. 4.16～14. 4.19	中国四国農政局研修
平成14年度Ⅲ種試験採用者研修	鈴木 崇仁	総 務 部	14. 4.22～14. 4.25	農林水産研修所
第25回研究交流センター英語研修 (初級コース)	芝原 希	総 務 部	14. 4.中旬～14.12.中旬 (50回)	文部科学省研究交流センター
平成14年度開発援助研修 (PCM 手法研修 モニタリング・評価コース)	大津 善弘	生産環境部	14. 6.24～14. 6.28	外務省経済協力局
平成14年度第1回接遇研修	坂井 佳子	安芸津総務分室	14. 7. 9～14. 7.12	大臣官房秘書課
平成14年度司書補講習	谷田部 知子	企画調整部	14. 7.15～14. 8.27	文部科学大臣
第75回関東地区中堅係員研修	浅田 幸子	総 務 部	14. 7.16～14. 7.19	人事院関東事務局

■渡航実績

(平成14年4月1日～平成14年8月31日)

氏 名	所 属	渡航目的	主要訪問都市	期 間
今田 準	生産環境部病原機能研究室長	JICA運営指導調査団	ブラジル・ベレン	14. 5.11 ～14. 5. 2
根角 博久	カンキツ研究部素材開発研究室	JIRCAS共同研究	ベトナム・カントー	14. 7.22 ～14. 8. 7
梶浦 一郎	所長	第26回国際園芸学会	カナダ・モントリオール	14. 8.10 ～14. 8.18
真田 哲朗	遺伝育種部長	第26回国際園芸学会	カナダ・モントリオール	14. 8.10 ～14. 8.17
本多 親子	生理機能部形質発現研究室	第26回国際園芸学会	カナダ・モントリオール	14. 8.10 ～14. 8.19
杉浦 俊彦	生理機能部環境応答研究室	第26回国際園芸学会	カナダ・モントリオール	14. 8.10 ～14. 8.19
伊東 明子	生理機能部栽培生理研究室	第26回国際園芸学会	カナダ・モントリオール	14. 8.10 ～14. 8.18
羽山 裕子	生理機能部栽培生理研究室	第26回国際園芸学会	カナダ・モントリオール	14. 8.10 ～14. 8.18
大村 三男	カンキツ研究部遺伝解析研究室	第26回国際園芸学会	カナダ・モントリオール	14. 8.10 ～14. 8.19
古藤田信博	リンゴ研究部育種研究室	第26回国際園芸学会	カナダ・モントリオール	14. 8. 9 ～14. 8.20
猪俣 雄司	リンゴ研究部栽培生理研究室	第26回国際園芸学会	カナダ・モントリオール	14. 8. 9 ～14. 8.20
小林 省蔵	ブドウカキ研究部上席研究官	第26回国際園芸学会	カナダ・モントリオール	14. 8.10 ～14. 8.18

■依頼研究員

(平成14年4月1日～平成14年8月31日)

氏 名	所 属	試験研究課題	期 間	受け入れ研究室
森本 隆義	鳥取県園芸試験場	落葉果樹のゲノム解析に関する研究	14. 5. 1～14. 7.31	遺伝育種部育種技術研究室
中島 正人	鳥取県園芸試験場	ナシ、モモの成熟に関する研究	14. 6. 1～14. 8.31	生理機能部環境応答研究室
松本 和紀	福岡県農業総合試験場園芸研究所	カンキツの水分生理機構解明のための調査手法の修得	14. 6. 1～14. 8.31	カンキツ研究部栽培生理研究室
八田 聡	佐賀県果樹試験場	果実の健康増進成分の分析手法の習得	14. 6. 1～14.11.30	カンキツ研究部品質機能研究室
加久るみ子	熊本県菊池農業改良普及センター	果樹根機能と果樹園の養分動態	14. 6. 3～14. 8.30	生理機能部根圏機能研究室
清水 伸一	愛媛県立果樹試験場	カンキツ類のウイルス・ウィロイド病の検出技術の開発	14. 6.17～14. 9.13	カンキツ研究部病害研究室
松田 成美	山形県立園芸試験場	セイヨウナシ、オウトウのDNAマーカー開発手法及び利用法の修得	14. 7. 1～14. 9.30	遺伝育種部育種技術研究室
徳満 慎一	富山県農業技術センター果樹試験場	土壌養分の変動解析、根系調査方法等を活用した果樹園における土壌調査及び樹体調査の研修	14. 7. 1～14. 7.26	生理機能部根圏機能研究室
浅川 将暁	佐賀県上場営農センター	高糖系温州みかんにおける着花生理の解明及び対策技術の修得	14. 7. 1～14.12.31	カンキツ研究部栽培生理研究室

■養成研修

平成13年度修了生

(平成14年4月現在)

コース	人数	進 路
落葉果樹コース(つくば)	9	農業就労者 4名 就 職 2名 農業団体 1名 その他 1名 研修・講習 3名
常緑果樹コース(興津)	10	農業就労者 7名 就 職 3名 農業団体 2名 その他 1名
落葉果樹コース(口之津)	10	農業就労者 8名 就 職 1名 農業団体 0名 その他 1名 研修・講習 1名

平成14年度入所生

(平成14年4月現在)

コース	人数	出 身 県
落葉果樹コース(つくば)	6	福島県 2名、神奈川県 1名、静岡県 1名、福岡県 1名、熊本県 1名
常緑果樹コース(興津)	12	愛媛県 2名、長崎県 1名、静岡県 1名、愛知県 3名、和歌山県 5名
落葉果樹コース(口之津)	13	福岡県 1名、長崎県 6名、熊本県 6名



果樹研究所ニュース 第3号 (平成14年9月30日)

編集・発行：独立行政法人 農業技術研究機構 果樹研究所 National Institute of Fruit Tree Science

事務局：企画調整部 情報資料課 TEL 0298-38-6454

住 所：〒305-8605 茨城県つくば市藤本2-1 <http://fruit.naro.affrc.go.jp/>